我が国の大正期における剣道の発展に関する研究

A study of the Development of Kendo during the Taisho Period in Japan

1K04B160-5

中西 敦子

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 小野沢弘史先生

1. 本研究の動機、目的

<本研究の動機>

私は幼い頃から現在に至るまで、様々な形でスポーツに関わってきた。中でも特に大学時代、剣道部での経験を通して日本の「伝統」と呼ばれている風習に対する見方が変わり、疑問を抱くようになった。それは、伝統校と呼ばれている大学の体育会運動部活動では全体的に封建的な性格を持っている傾向があり、その中でも特に武道に属する部では一層その傾向が強いということであった。何でも「伝統だから」ということで現状を客観視せずにそのまま放任されることで、しごきや暴行といった問題に発展するという例も少なくないように思う。

さらにこの疑問に加え、学校教育の中では剣道の授業が「正坐・坐礼」を徹底的に行い、礼儀作法を強調した躰教育の手段となることにも興味を持った。

そして卒業論文のテーマを考える時期にあたり、これらの疑問がきっかけとして、日本人の一部が考える独特な「伝統」の内容を含んだ剣道と、それがどのように発展してきたのかを知りたいというのが本研究の動機となった。

また、大学を卒業すると共に競技として剣道をする事から引退する際に、本研究が私自身の携わってきた剣道に対する総括となり、自分自身を客観的に見ることが出来ると考えた。

<本研究の目的>

本研究では、日本における剣道の発展の過程を調べる。まず、今現在一般的に行われている剣道の形成過程として、防具を着用し竹刀で打ち合う竹刀打ち込み稽古法の誕生した江戸時代の幕末、さらにそれが日本の近代化を経て変容することとなった明治期に時代を遡り、当時の剣道における変容過程を明らかにしたい。特に、このような変容を遂げてきた剣道が、大正期には軍国主義下で国粹主義の手段とされながらも発展した事実を焦点を当て、当時の社会時勢や政治との関わりを含めながら明らかにしていきたい。そして最後に、大正期を中心とする剣道の形成の歩みが現在にもたらした影響や課題について考察していきたい。

2. 各章の要約

<第1章>

徳川時代の剣道はその治世が 200 年以上の長期にわたったため、時によっては隆盛を極めたり、また、剣道そのものの修練方法も形を中心とした剣道から、防具の工夫と袋竹刀による剣道への進歩、あるいは儒教の影響による武徳の昂揚と、すでに武道の前近代化があったこととして見る事ができる。そして、この頃の竹刀打ち込み剣法が体系化され現代剣道となっている。明治維新の時勢によって衰退した剣道は撃剣興行や山岡鉄周の独特な理念と結びつき復活し、特に西南戦争を契機とした警視庁剣道での隆盛や日清・日露戦争は国民に武道を重視する気運を生み出した。

<第2章>

軍事的気運が高まり、国粹主義によって日本的な特徴が強調され始め、「伝統文化」としての武道が台頭する。天皇制国家が成立し、さらに武道界を統括するための組織として大日本武徳会が設立された。武徳会は対外的には富国強兵政策を掲げ、国内的には国民を支配統治するための治安維持対策とともに、教育・文化のあらゆる面において武道による思想統制を行った。明治 11 (1878) 年に制定された軍人勅諭では武士道による徳目を掲げ、国民を兵士としてつくり上げていき、さらに、近代国家として日本人を一つの国民としてまとめるために一斉指導が行われ、武道が思想善導の手段として役割を果たしたのである。

<第3章>

現代剣道は、剣道それ自身の技術・文化価値を追求する目的的な剣道に改められた。しかしながら未だその普遍性は確立されておらず、剣道のあらゆる動作や形式的な秩序が「伝統」として成り立ち、陋習化している。このことは現状に対しての批判的視点を欠いたものとなっている。

<結章>

大正期における剣道の発展の歩みが教えるものは、すべてが「伝統である」と片付けられてしまうことで自ら将来に向けての発展を止めることに繋がり、今後の武道の文化的課題として、武道の主体性を確立し、文化的価値を問い直すことの必要性があるということだと考えられる。